

人物紹介

日比野 進

中部大学生命健康科学部生命医科学科 下方 薫

はじめに

日比野進教授が主宰された名古屋大学内科学第一講座は、血液病学、神経内科学、内分泌内科学、呼吸器内科学、循環器内科学、消化器内科学と多岐にわたる研究分野を包含するが、ここでは呼吸器内科学に関する主題について触れることとする。

日比野先生と結核症との出会い

日比野進先生は昭和6年愛知医科大学（名古屋大学医学部前身）を卒業され、その年、勝沼精蔵教授の教室に入られた。昭和9年に勝沼教授が日本結核病学会の宿題報告「肺結核症の予後判定の基準、血液学的方面」を担当されたが、この研究を手伝われたことが、その後長く続く日比野先生と呼吸器疾患の関わりのはじめであった。昭和24年12月に日比野先生が名古屋大学教授（内科学第一講座）に就任され、教室の研究の柱の一つが結核症となった。当時は呼吸器病と肺結核症とはまったく同義語であったと言ってよい。それほど日本における結核症の比重は高く、日本の運命を左右する重要な疾患であり、他の多くの呼吸器疾患は結核症の陰に隠れてしまっていたと言える。第29回日本結核病学会が勝沼精蔵学長のもとで昭和29年4月に名古屋で開催され、日比野教授が特別講演を担当することになった。その主題には結核菌の生化学的研究の問題が選ばれ、題目は「結核菌の化学—殊に耐性菌に関して」であった。当時の特別講演は2時間以上の大講演であった。

結核症から非結核性疾患への橋渡し

昭和30年代後半になり、呼吸器病のなかで結核の占める比重が次第に低下するという驚くべき時代に遭遇することになる。そしてこの転機は昭和35年10月に「第1回胸部疾患シンポジウム」が名古屋で開催されたことをもって始まりとなる。昭和36年の名古屋における日本結核病学会での開会の挨拶で日比野教授はその傾向を述べられ、また当時のいわゆる「非結核性胸部疾患」の振興のためにこの学会では多くの配慮をされ、いろいろな企画をされた。昭和36年10月に「第2回胸部疾患シン



ポジウム」が北本治教授のもとで東京で開催されたが、これが第1回日本胸部疾患学会の創設となっていったのである。

結核病学会会長としての活躍

日比野教授が会長を務められた第36回日本結核病学会で特筆すべきことは、学会速報新聞が会期中の毎朝、朝刊のようにして配布されたことである。学会がいくつもの会場に分かれて行われていることや、内容も膨大であることから、せめてセクションの座長のまとめと感想を取材して新聞のかたちで配布できたらとの日比野先生のお考えであった。座長が降壇されると別室に案内して直ちに原稿を書いていただき、すぐにタイプ印刷にまわす。新聞として出来上がるのは夜を徹して行われたこのような努力があったからであった。学会はこの速報だけではなく、すべての点において配慮が行き届いており、学問のためのサービスという点で特筆されることであった。

非定型抗酸菌症への取り組み

結核菌の生化学的研究を行っていた文部省の総合研究班が昭和34年に「抗酸菌の変異と分類」(班長・戸田忠雄教授)に改組された。これを受けて日比野教授は昭和37年の第37回日本結核病学会で特別講演「非定型抗酸菌症の臨床」を担当された。この研究は非定型抗酸菌の排菌例を1例ずつ現地調査して積み重ねたものである。後に「日比野-山本の診断基準」と呼ばれるものを設定し、日本における非定型抗酸菌症の臨床像を明らかにしたものである。この研究はその後、文部省や厚生省の研究費を得て引き継がれ、昭和44年以降は非定型抗酸菌症研究協議会(代表世話人・日比野教授)となってわが国の本症の研究の中核となっている。非定型抗酸菌症の一連の研究により、日比野教授は岡田博教授とともに昭和40年に中日文化賞を受賞された。昭和43年には第8回日本胸部疾患学会の会長を務められた。結核症が中心であった時代から非結核性疾患が大きく取り上げられるよ

うになった時代へと橋渡しをされた日比野教授にとっては、感慨深いものがあったものと拝察する。

おわりに

昭和43年4月名古屋大学教授を退官され名誉教授とされた。昭和56年5月には結核予防会結核予防功労者賞、昭和63年には勲二等旭日重光章を受賞されている。明治42年6月18日のご誕生、平成17年6月16日、あと2日で満97歳を迎えられる日に逝去された。41歳で教授に就任され、多くの後進を育成された。先生は山歩きがお好きで、その健脚ぶりはつとに有名であった。晩年には句集「ヴァチカンの僧」「レマン残照」を著されており、また医学史随筆である「余滴」を愛知県医師会発行の「現代医学」に15年間にわたり掲載された。90歳を過ぎられても頭脳明晰であり、清貧な一生を過ごされたことに深く敬服するものである。